

見本

平成25年度

社会情報学部小論文問題

(推薦入試)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子と答案用紙は以下のとおりです。
 - (1) 問題冊子・・・・・・・・・・5ページ
 - (2) 答案用紙・・・・・・・・・・2枚
 - (3) 下書用紙・・・・・・・・・・2枚
- 3 問題冊子及び答案用紙に、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
- 4 解答は、指定の答案用紙に記入してください。
- 5 答案用紙の所定の欄に受験番号を必ず記入してください。
- 6 試験時間中、解答した答案用紙を脇に置く場合は、不正行為防止のため答案用紙を裏返して置いてください。
- 7 答案用紙はすべて回収します。問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いつの時代でも新しいメディアが普及しはじめると、必ずと言っていいほどそのメディアに対して批判の声がわき起こる。新しいものに対して拒否反応を示す「ネオフォビア(neophobia)」は、メディアやコミュニケーションに関する技術革新においてとくに顕著だ。

コミュニケーション技術として最も古く、また人類の進化史上画期的であったものに「文字」がある。文字の起源は、今から 5,000 年以上前のメソポタミアで使われた楔形文字とも言われるが、人類史において長らく独占的なコミュニケーション手段の地位を占めていた「声」を視覚化し、その内容の保存を可能としたことだけでも文化の発展に及ぼした影響力は計り知れない。¹⁾

…(中略)…

どのような画期的な発明であったとしても、文字に始まり、インターネットに至るまで、あらゆる革新的メディアはそれが普及する過程で猛烈な非難を受けてきたということは確実に言える。

たとえば、電話も、アメリカでは、その普及によって人々の直接的交流の機会が減ると懸念された。ワープロでさえ、漢字を忘れる、単なる切り貼りが増える、といった表面的な批判だけでなく、生活に密着した具体的な語が使われることが少なくなり、また内面的思考力が衰えるといった指摘もあった。さらに、日本語文化において受け継がれてきた漢字の書字行為と脳の活動の連動が分断されることで「全体的思考力」が失われると述べた人もいた。彼は、やがて詩人や小説家が「文章作成機」を放棄するだろうとも予言したが、現実には、現在、ほとんどの作家がワープロソフトを用いている。

そうしたメディアの中でもこれまで最も数多く議論が交わされてきたのはテレビだろう。「一億総白痴化」を招くといった意見だけでなく、青少年の学力、攻撃性、犯罪などとの関連が実証的に議論され、また最近も乳幼児の言語発達や空間知覚への悪影響について論争が続いている。

ここでは、そのテレビと、近年急激に研究が進んでいるインターネットを中心に、主に社会心理学的アプローチによる実証研究の成果についていくつかの知見を紹介する。青少年の攻撃的傾向の助長や性犯罪との結びつきなど、多くの点でテレビとイン

¹⁾ この後、古代ギリシアの哲学者プラトンによる「文字」批判が紹介されるが、ここでは省略する。

ターネットで同様の議論が展開されており、テレビに関する研究の知見がそのままインターネットにもあてはまることが少なくない。

テレビについては、様々な国で、それぞれの状況に応じた研究が行われているが、最も研究の蓄積の大きいのが、普及が早かったアメリカである。ここで日米両方の研究結果を比較することにより、「メディアと日本人」について一層、理解を深めることができよう。さらに、我々の生活にもたらした影響という点ではテレビにも劣らないインターネットをめぐる議論についても解説する。

なお、どのメディアも悪影響だけでなく当然、好ましい影響も多い。メディアの世界では、必ずしも社会や人にとって有益なものだけが生き残るわけではなく、また逆に「悪貨は良貨を駆逐する」わけでもないが、テレビをとってみれば、現実に私たちに与えてくれた恩恵には莫大なものがある。影響に善悪両面ある中で、ここでは、弊害があれば、早急に対処すべきであるとして、社会的に問題視されてきた「悪影響」に限定して話を進めることにする。²⁾

…(中略)…

テレビは一方向の情報流通を基本とするが、インターネットは双方向である。また、一对多のコミュニケーションもできるという点で電話とも大きく違っている。そうした特性から、様々な意見のやり取りによって一つの「世論」が形成される過程にも、これまでにない変化を及ぼしていることが考えられる。

社会心理学の領域では、かなり以前から、集団討議が意思決定に及ぼす影響や、パソコンなどのメディアを介したコミュニケーション(CMC: computer-mediated-communication)が、通常の対面コミュニケーションとどのように異なるかについて、研究が重ねられてきた。

集団討議については、まず、個人で単独に決定を行うより、より危険率の高い勇ましい意見が優勢になりやすいことが見いだされた。その後、テーマや参加者によっては、リスクを懸念する声が優勢になると、慎重な結論に収縮する場合もあることも確かめられた。総じて集団討議では、個々のメンバーの持っている傾向がより強められた結論が出やすいこと(集団極化)が明らかになっている。

また、CMCは社会的存在感(「相手の存在をどれだけ身近に意識させるか」の程度)の比較的低いメディアであり、対面状況ほどの説得力を持ちにくいこと、社会的地位や年齢などの「社会的手がかり」が得にくく、議論への平等な参加が促進される反面、

²⁾ 以下、テレビの悪影響についての説明があり、その後、インターネットの悪影響の説明がなされるが、ここではその一部を省略する。

言語的暴力が発生しやすいことなどの研究成果も示された。

こうした知見は、今日の「ネット議論」の特性を読み解く一つの鍵ともなりうる。

ネット空間では、意見を交換する場が無数に提供されている。知り合いの仲間が議論を交わすコミュニティサイトや「2ちゃんねる」のような大規模掲示板、一利用者の質問に何人かが回答をよせる「Yahoo!知恵袋」などである。

そうした言論空間で、しばしば暴言が飛び交ったり、誹謗中傷が横行してサイトが混乱状態になる、いわゆるフレーミング(炎上)が起こることがある。また、「ネット右翼」的な現象や、一部のサイト上のネット投票結果が、一般世論とかなり異なった方向の結果を示すなど、議論が一定の方向に極端に傾く場合がある。

これまでの研究によれば、ネット上の議論でフレーミングが発生しやすい理由は次のようにまとめられる。

一つの原因は先に述べたように、コミュニケーションの際の「社会的手がかりの欠如」だと言われる。通常、ネット上のやりとりでは顔や服装などの視覚的情報、あるいは声などの聴覚的情報が伴わない。したがって、普通の直接的コミュニケーションでは容貌や声から容易に推測される性別や年齢、社会的地位などの情報が欠如する。たとえ、それらをメッセージ内で明らかにしていたとしても、それが本当だという保証はない。その結果、年齢や社会的属性などの上下関係に対する気遣いや性別にとられない平等な発言が交わされやすく、議論が活発化することもあるが、一方で相手に配慮を欠いた発言が飛び出しやすい。

また、通常のコミュニケーションでは、少々失礼な言葉や皮肉を述べても、笑みなどの表情で内容を緩和できたり、発言がジョークであることを明らかにしたりすることができるが、ネット上ではそうした非言語的なシグナルによる補正がききにくい。

ネット上のメッセージのやりとりだと、言葉の細部に神経が集中し、揚げ足取りの応酬が生じることもある。ネットでやりとりする相手とは、価値観や背景的知識を共有しない場合も多く、互いのメッセージの理解をめぐって、十分真意が伝わらず、いらだちが増すことも多い。

また、多くのネット上の言語空間では、匿名でメッセージがやりとりされるため、自分の行動が人からどのように評価されるかをあまり気にしなくなり、社会的な規範による抑制がきかず、責任感の欠如した無礼な発言もされやすい。その多くの発言は、推敲もされないまま、感情のほとぼしりに任せて打ち込まれたものである。

一人の感情的な発言が呼び水になり、互いに言語的暴力の応酬になったり、次々と悪意を含んだ過激な発言が集中したりすることでしばしばサイトは「炎上」する。

一般に、集団的討議の場で意見が極端な方向に傾くことを社会心理学では「意見の極化」と呼んでいるが、とくに、より危険度の高くなりそうな極端な方向に議論が流れることを「リスキーシフト」と呼ぶ。たとえば、管理職との団体交渉に臨む直前の

組合員同士の議論、ある種の宗教団体の集会などを思い浮かべるとリスクシフトの発生が想像しやすい。

リスクシフトが生じる理由については、勇ましい意見が大きな声になりやすく、反対意見を提示するのに躊躇する状況が生まれること、集団の中であって、より目立とうとする心理が大胆な意見を誘発すること、リスクが高くなっても責任が分散されるため、結論を実行した場合の結果を十分熟慮しないような発言が横行することなどがあげられている。

また、それまで自分では予想もしなかった説得力のある意見が提示され、同様の方向性の意見が続いて出されることにより、自分の考えがそちらになびきやすいことや、集団内で大勢を占めるだろうと自分が判断した意見に同調することで自己を集団内でより適切に位置づけようとする動機付けが働くこと、なども理由として考えられている。

ネット上では、匿名状況が多く、相手の顔も見えないので、対面状況の場合以上に責任感が希薄化し、また、より大胆な意見がその場の雰囲気を変えて支配しやすくなる。

ネット上での言語的暴力の発生や意見の極化は、それぞれの言語空間の特性による。相手がどのような人物かまったく予想もつかず、発言は完全に匿名で、管理者的な存在も見あたらない場合、自分勝手に人に配慮しない発言が行われ、感情的対立や誹謗中傷が生まれる確率が高くなる。逆の状況では、そのような発言は抑制される。

一方で、参加資格が限定されていたり、一定の考えをもつ人だけが集まるような言語空間では、視覚的匿名状況(相手が誰かわからず、外見的特性も判断できない状況)にあっても仲間意識の程度が強ければ、その場の集団的価値観に即した発言を強いるような集団規範圧力が働く。その結果、参加者も、場の雰囲気に合わせた発言、さらにはその雰囲気を誇張するような発言を率先してするようになる。

この場合、匿名状況が、個人的なアイデンティティを最小化し、むしろ個人を集団的なカテゴリーに埋め込むように作用するからである(「社会的アイデンティティモデル」と呼ばれている)。その結果、言語的暴力の応酬は少ないが、議論が非常に片寄った方向にシフトしていく場合がある。

現実に、日本の掲示板サイトでも、外国人への差別意識をむき出しにしたり、犯罪の被疑者を一方的に断罪したりするスレッドがある。そこでの「匿名」は、単に発言の責任を減免するためにあるだけでなく、個人を集団に埋没させる方向にも機能している。そして、ときによっては、その匿名集団の中で凝集した感情が、オフラインの集合行動として現実化する場合もある。

(出典：橋元良明著『メディアと日本人—変わりゆく日常』(岩波新書、2011年)

出題の都合上、一部改変した。)

- 問1 下線部にある今日の「ネット議論」の特性について、本文に即して具体的に600字程度で説明しなさい。
- 問2 今日のネット議論の特性について、あなたの考えを600字程度で述べなさい。